平成　　22年　12月20日

財団法人 笹川記念保健協力財団
理事長　紀伊國　献三　殿

所属機関・職名
社会医療法人　栄光会　栄光病院
看護師

研修者氏名　　印
梅野　理加

平成２２年度日本財団ホスピスナースネットワーク会員に対する海外研修助成
研　修　報　告　書　の　提　出　に　つ　い　て

標記について、下記のとおり報告いたします。

記

１．研修課題

２．研修期間　平成 22年 10月 10日 ～ 平成 22年 10月 17日（8日間）

３．研　修　先　メモリアル・スローン・ケタリングがんセンター（米国/ＮＹ）
「研修名：がん看護の専門性を学ぶ米国視察研修」

４．研修報告書

別紙　（正1部、副３部）、FD・MO・CDR等［（有）（　／枚）・無］

（注　研修報告書はＡ４判横書き８，０００字程度）

別紙

Ⅰ　本研修の成果：学んだこと、今後役立つと思う点について

Ⅱ　今後の課題等

Ⅲ　本研修助成についての改善点及び当財団へ対するご意見ご要望など

2010年　がん看護の専門性を学ぶ米国視察研修
研修期間　2010年10月10日～10月17日
研修先　米国　ニューヨーク　メモリアル・スローン・ケタリングがんセンター
同行解説　石垣　靖子先生　北海道大学大学院教授

Ⅰ　本研修の成果：学んだこと、今後役立つと思う点について

＜研修内容＞
専門看護の役割、骨髄移植、肺がん、オストミーと創傷ケア、統合医療
痛みと緩和ケア、患者指導・教育、禁煙指導、
放射線治療、患者の安全、スピリチュアルケア、サバイバーシップと倫理
外来化学療法に関すること

＜研修で学んだこと＞
①　ニューヨークは異なる生活価値観を持った人々が集まる土地柄でもあり、緩和医療においてどのように、価値観や文化的背景を合わせながら患者さんや家族の考えを尊重しバランスをとっているのかを学ぶ。

私は、患者指導・教育に癌の患者さんであっても禁煙指導を行うことに驚きました。診断を受けていても禁煙指導をおこなっていました。肺炎感染症のリスクを避けるため、また、緩和ケアにおいても息切れや呼吸困難感の症状についてのコントロールを行うためには必要なことで患者さんと十分に話し合う必要性を感じとても必要なことであると思いました。ホスピス病棟においては最後だからと喫煙をして、煙草のことについてはあまり話しをしないのが印象的ですが強制ではなく患者さんや家族と話し合いながら指導・教育していくことも必要であると感じました。
ケタリングがんセンターにおいても実際にははじめに医師が関わるとい事でした、しかし十分ではなくできない時もあるためできていない時もあり看護師やチームで関わりを持っていました。ニューヨークにおいてたくさんの文化や背景が異なる中、患者教育は大切なことであると感じました。がん患者さんは今後も増えていくため、ケタリングがんセンターでは、セルフケアが重要になってくると話していました。日本においてもがんの患者さんは増えていくので医師だけではなく看護師に対しても必要のある患者指導や教育ができるようにする必要があると感じました。
　看護師の教育では、すべての看護師が症状緩和ができることが必要であると話しがありました。外来や病棟あらゆる所の患者さんの関わる看護師にすべてに教育のプログラムがありました。看護師の協力が必要であり、どのケアにおいても患者教育は必要でありいろいろな場面においても教育をするために看護師は関わりを持ちます。そのためケ

タリングがんセンターでは、疾患別にチームがあり看護師だけではなく薬剤師、ソーシャルワーカーまで含めて患者教育に関わっていました。日本ではマンパワーの不足から医師や看護師がその教育を担っていることが現状なのではないかと考えます。日本において今出来ることは看護師だけでなく様々な医療職が協力しチームを組んで患者さんのケアに関わることが大切であると研修で感じることができました。患者教育において人を変えることは難しいですが、私たち自身が変わることが大切であると、私たちが変わることでより良いケアにつながると学ぶ事ができました。

② 緩和ケア認定看護師として1年が経過しスタッフや研修生の指導、教育に携わってきました。今回、研修に参加することで認定看護師としての役割を再認識できる機会にする。

Nessa Coyle講師の話では、がんに関わる看護師は緩和ケアに精通していることが大切であると話していました。スキルを身につけることは責任でもありまた施設としても責任をもって関わることが大切であると話していました。ホスピスナースは、地域や病院などリエゾンナースとして、入院中から関わりを持つことが大切であると話していました。ホスピス病棟への移行は患者さんにとってケアのタイプが変わりホスピスナースとしてサポートしていく必要があると話していました。ホスピスナースが来る事で患者さんにとっては、悲しい、死を意識することが多くあります。単なる情報提供ではなくもっと深いものの中でのかかわりをもっていく必要があり新人看護師においても患者さんには同様でこのことを教育の中に取り入れる必要があると話していました。患者さんはホスピス病棟に来ると安心したという方と来たくなかったという方と両者です。患者さんや家族にとってホスピス病棟は死を意識するところでもありそのような環境の中で私たちは思いをくみ取りながらケアを行っていました。事例の中で、ICUから一般病棟に移るときの家族のストレスに対するケアで、モニタリングすることが亡くなりケアを受ける場所が移行する時に患者さんや家族は苦しみを持つことがある、患者さんが終末期においても感情面のケアやスキル面のケアそれぞれの立場からケアができる、ケアのゴールが関わりが必要な時カンファレンスに参加することが必要でできるだけ参加していると話していました。大切なことはチーム全体で患者さんのケアや意思決定について話し合うことであるということでした。ケタリングがんセンターでは、臨床倫理委員会から緩和ケアの介入について話し合いが行われ必要時介入していきました。また緩和ケアだけでなく臨床倫理委員会は緩和ケア、ICU の両方に準備ができてあり両者の立場からケアの方向性について検討されることが大切でした。またリエゾンナースとしては患者さんや家族に顔の見えるケアが大切でありコミュニケーション能力や病棟やICUにおいてもスタッフにおいても顔の見える立場で関わりを持つことの大切さを話していました。

私はホスピス病棟に勤務していますが、緩和ケア認定看護師として緩和ケアは、看護師として癌だけでなく必要なケアであると考えます。看護師は協働の臨床実践である事、より良いケアの実践を行うこと、私たち自身もサポートされていることが実感することが大切であると話していました。それぞれの分野の関わりを否定することなく、その場所の仕事を奪うことではなくサポートすることが専門職として大切であると話していました。私のできることはスタッフや患者さんとの、橋渡しができるような存在でもありたいと思います。存在が脅威になるのではなくできていないからと言ってサポートするのではなくサポートが必要であるから成熟していくのであると話していました。私自身も認定看護師としてサポートできるように努めていきたいと思います。また、緩和ケア・ホスピスケアは関係性のケア、寄り添うケアでもあると話していました。場所を問うのではなく自発的に患者さんやスタッフまたは家族が必要であると感じたときに関わりが持てるような仕組みや環境を整えることができるように取り組んでいきたいと思いました。そして、私たちはいかに患者さんの自己決定を尊重し人として支えていけることができるのかを考える必要があると話していました。それはコミュニケーションも大切であり人として尊重することが大切であると反していました。倫理については時間があまりなくて今後、時間があればもう一度学びたいと考えます。人の自己決定は繰り返し患者さんだけではなく家族との関係性も重要であると考えます。日本において「おまかせ医療」は多く医療者の意見が多くを占めることもあると思います。しかしこれからは考えることも大切であり患者さんやその家族においてどのように望むのかを意図がどこにあるのか、ケアのゴールはどこにあるのかを検討することが求められてくるのではないかと思います。これは、スタッフを守り患者さんを守ることにもつながるのではないかと思います。認定看護師としての今後の課題として取り組んでいきたいと思いました。

③　自分の役割として、求められている役割は何かを明確にすること、主任やリーダーとして仕事を実践していく上で、知識や実践力・どうすれば納得のできる仕事ができるのかを考えること。

スピリチュアルケアの講義の中で私たちは苦しみを立ち向かう人のできる人でありある人が診断を受けたとしても看護を求めて人はやってくる。そのために私たちはケアに関わることができると話していました。私の経験の中で患者さんや家族はケアを求めてホスピス病棟に入院してきます。それは治療だけでなくそれだけでは足りないと感じているからこそ、看護が求められているのだと話していました。ケアするという事は看護師だけでなく多くの人の関わりが必要であると話していました。患者さんはベットに横になっているだけでたくさんの事を考えます。また様々な問題がみえてくる。最後の時まで信念を持っている人もいれば挑戦している人もいる臨床の場において私たちは人生の答えを求めら

れることもある。チャプレンだけでなく患者さんや家族の関わる人すべてにおいて人生の問いを答える機会を持つことがある。そのために私たちは、人生や経験をふまえた上で関わりを持っていく必要があります。チャプレンはプロフェッショナルとして傾聴する人と講師の先生は定義していました。患者さんや家族の話を聞き感じその事を伝え支えていくことができる人であると話していました。また看護師としてではなかなか言える言葉ではないと感じたのは、患者さんに「あなたに与えることのできる私の持っているすべての時間を持って話を聞きましょう」と伝えること、それだけその人の話を集中して聴くということの重さを感じることができました。スピリチュアルケアにおいて大切なことは、「話すこと・聴くこと」が必要であると研究からも示されているとの事でした。聖書の言葉に「もし私が人間の性質の中でもっと強い洞察を述べよと言われたら誰一人自分以外のものや人の助けなしに人生の意味を支えるだけの力を持っている人はいない」という話をされました。人の支えなしには考えることも難しくまた、人から多くの知性や学びを与えられるのではないかと感じました。宗教は信仰をもっている人には大切なことであり、持っていない人も、また話をすることでまた、傾聴することで「あるがまま」を受け入れることが大切であると学ぶ事ができました。自分の役割の中で今までたくさんの患者さんや家族に会う事ができました。その中で患者さんの話を聞きともに悩みながら過ごして来ました。その事を私は看護師に伝えサポートできる環境を作る必要があると考えました。私は主任としての立場を考え看護師支えと感じられるような人になりたいと感じました。スピリチュアルケアの講義の中でも私たちは患者さんや家族のサポートをする人でもあり人生の大切な時間を共有させてもらっていると感じます。そのためにも患者さんや家族とのかかわりを通してスタッフやそれに関わるチームのメンバーと協力できるように努めることが私自身のできることではないかと考えます。
また、今までにプライマリーナースとして、患者さんを担当し、たくさんの事を教えていただきました。その中で、印象に残っている 70 歳代の肺がんの患者さん、「感謝、感謝、出会いに感謝」と亡くなりました。また、40 歳代の頚部腫瘍の患者さんで、「お前が病気になればいい」といわれた患者さんがいました。私は、その患者さんに、自分のできる症状コントロール、精神的ケア、スピリチュアルケア、家族ケアと実践しました。それは多くの経験を通しておこなえた看護であり、そのことを、確実なものとしていきたいと考え、緩和ケア認定看護師を目指しました。その事を忘れることなく継続してケアを実践できるようにしたいと感じました。

④ メモリアルケタリングがんセンターにおいて、最新の医療技術と看護ケアについて学ぶ

外来化学療法での見学では、地域に密着して考えられて作られていました。地元のアーティストの人たちに施設のロビーのオブジェを依頼していました。コンセプトも伝えられていました。それは地域の患者さんだけではなく人と人とのつながりが伝わってきました。

人にはだれもがストーリーがある患者さんのあなたのストーリーを聞かせてくださいと手紙のように一つ一つ丁寧に書いてありました。施設には寄付をしてくれた人アーティストの名前なども書いてありたくさんの協力があるのだということが分かりました。化学療法の最中でも担当医と話ができたり個室で過ごす時間を大切に綺麗に配慮されていました。働いている看護師にも教育が行き届いていてさらに、キャリアアップできるように整えられていました。

放射線療法では最新の機器を使い患者さんに負担の内容に細かく位置や姿勢、教育が整えられていました。細かなパンフレット、手袋の着用の仕方までもが確実に視覚でとらえられるようになっていました。私自身最新の治療はホスピス病棟での勤務しかないのでとても新しく感じました。がん看護を行う上で最新の治療にについて知ることは患者さん自身の経過を知ることいろいろな選択肢があることでケアの幅も広がるのではないかと感じました。

看護師の教育につい、てケタリングがんセンターでは実践看護委員会という委員会があり化学的根拠に基づいてケアを行えるように教育を行っていました。４か月の研修を行った後にその後は、疾患別に分かれて教育が行われていました。これは生理学の知識はもちろんですが医師と話が十分にできるように変化を理解しケアができるように教育が行われていました。腫瘍学、生物学など教育が充実していました。印象的だったのは、ケタリングがんセンターでは看護師が尊重されていると感じると講師の先生が話していました。日本でもチームで関わることの大切さを感じることはありますが尊重されていると感じるはっきり講師の先生が話をされたのは素晴らしいと感じました。

ニューヨークでは、医療行為を行えるＮＰと看護ケアを行うＣＮＳがありました。日本においても専門看護師、認定看護師が活動しています。ニューヨークでは行える仕事がはっきりしていてすみわけがしやすいように思いました。内容がはっきりしているので活動しやすいのでは感じます。日本では配属された部署において仕事内容が変わります。専門看護師においては管理の分野や研究することで活動の場があると考えました。研究は看護の基礎を確立するうえで大切であり必要なことであると思います。また、今後特定看護師について日本も取り入れられるようになるとニューヨークのように仕事の分野をサポートできるように活動していくことが重要ではないかと考えました。

統合医療においては統合腫瘍学として代替療法とは違う分野で確率されていました。支持されているもののみを推奨していて、抗酸化作用やマイタケ、マッサージ、ハーブ患者さんが望むものを提供されていました。統合医療において信じているものを認め、害があることであればガイドラインを示す、同じ効果があることならば複数の選択肢を持つこともオプションとして広げる努力も患者さんに必要なことであると学びました。当院ではアロママッサージやリンパマッサージを行っています。その必要性を理解し今以上に充実できるようにしていきたいと思います。

Ⅱ　今後の課題等

ニューヨークは異なる生活価値観を持った人々が集まる土地柄でもあり、緩和医療においてたくさんの取り組みをしていました。日本とは異なり保険の内容など取り組みを違いがたくさんありました。しかしそのような中で、価値観や文化的背景を合わせながら患者さんや家族の考えを尊重しバランスをとっているのか。まずは話を聞くことチームで関わりを深めることが大切であると学ぶ事ができました。日本においてもチームの役割や大切さをもっと重要性を広めることまた当院でもカンファレンスや委員会を利用し活動していきたいと考えます。

緩和ケア認定看護師として２年が経過しスタッフや研修生の指導、教育に携わってきました。今回、研修に参加することで認定看護師としての役割を再認識できる機会にすることを目標にしていました。緩和ケアはあらゆる疾患に必要な子である事を再認識する機会になりました。私はホスピス病棟での勤務ですが他の看護師にもケアの大切さや必要性、看護師自身のサポートができるように努めることが大切なのではないかと考えます。それは、自分の役割として、求められている役割は何かを明確にすることにもつながっているのではないかと考えます。主任やリーダーとして仕事を実践していく上で、知識や実践力・どうすれば納得のできる仕事ができるのかを考えること、看護師の教育の必要性をまなぶことができました。認定看護師としてだけではなく主任という立場からも看護部のケアの質の向上は必要なことであると感じました。緩和ケアについて看護師が理解していること全人的ケアが広く理解できるようにすること、がんに関わるケアは包括的に患者さんにとってよいことを勧めることができるようにしたいと思います。ホスピスケアが看護の質のケアのモデルになるように努めていきたいと思います。

Ⅲ　本研修助成についての改善点及び当財団へ対するご意見ご要望など

患者さんやご家族のケアに携わり日々学ぶ事は多いですが、認定看護師として今後の活動に自信をもって関わることができるのではないかと考えます。また部署内では主任としてスタッフのモデルとなるよう活動していきたいと思います。また実習施設として、がん看護専門看護師、緩和ケア認定看護師などの実習のサポートを行い研修での学びを生かし関わりを深めていきたいと思います。

海外研修での学びは、緩和ケア認定看護師としてまたホスピスナースとしてとても学びの多いものでした。研修受講にあたり、日本財団からのご支援を頂き感謝申し上げます。また今後も努力していきたいと思います。